研究会の開催

古代官衙・集落研究会

2003年3月13・14日の両日、古代官衙・集落研究集会を開催しました。この研究集会は、在地社会における律令国家支配の実態について、学際的に考え、調査研究成果や問題点を共有する場として1996年から継続してきているものです。今年度からは、この会を古代官衙・集落研究会と呼ぶことにしました。

今回は、昨年度の墨書土器をめぐる研究集会を受けて、「古代の陶硯をめぐる諸問題―地方における文書行政をめぐって―」をテーマとしました。その趣旨は、古代の陶硯や転用硯、墨を取り上げ、陶硯の変遷、器種構成、分布状況、陶硯出土遺跡と遺跡の性格との関係、陶硯の形態と使用主体の階層性、墨の生産技術・流通などをめぐる問題を整理検討し、官衙における文書作成や木簡記載のあり方についての研究成果と総合しながら、地方における文書行政や文字を介した末端支配の実態などについて考えることです。

研究報告は、吉田恵二「陶硯研究の現状と課題」、西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」、神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」、生田和宏「城柵官衙遺跡における陶硯の様相―多賀城跡出土例を中心として―」、小田和利「地方官衙と陶硯―大宰府跡

出土例を中心として―」、宮瀧交二「東国集落と墨書行為」、大川原竜一・山路直充「古代の墨」、岩宮隆司「末端文書行政の実態(1)―籍帳の作成過程をめぐって―」、樋口知志「末端文書行政の実態(2)―地方における荷札木簡の記載をめぐって―」の9本で、参加者は、地方公共団体の職員、大学・博物館関係者等で100人余りでした。

討議では、陶硯の器種・法量の違いが使用者の階層や遺跡の性格を反映するものか否か、転用硯の機能と定形硯との使い分けの有無、朱墨の形状や朱墨用途、墨の在地生産・流通と地方における墨利用者との関係、郷段階での文書作成の実態、地理的環境と木簡記載のあり方などが主な論点となりました。

討議の中では50倍ルーペによる転用硯の識別など有益な観察方法が示されたり、関東では定形硯は官衙か郡司居宅などに限定され、地方官衙識別の指標となりうることなど興味ある指摘もありました。

また、今回は、平城宮跡発掘調査部考古第二調査室の協力によって平城宮・京出土の陶硯の遺物も展示し、その遺物観察による休憩時の議論も活発で、情報交換に大いに寄与することができました。

(埋蔵文化財センター　山中敏史)